

No. 1

インドネシア南東ラウエン州

農業農村総合開発計画

長期派遣専門家総会報告書Ⅰ

(農民組織強化分野：農村実務)

平成7年2月



国際協力事業団

108  
807  
ADT









インドネシア南東スラウェシ州

農業農村総合開発計画

長期派遣専門家総合報告書Ⅰ

(農民組織強化分野：西村美彦)

平成7年2月

国際協力事業団



1131408 [5]

インドネシア共和国南東スラウェシ州  
農業農村総合開発計画  
総合報告書

専 門 家	西 村 美 彦
分 野	農 民 組 織 強 化
派 遣 期 間	1991年 8 月 26 日 から 1994年 8 月 25 日 まで

## はじめに

インドネシアは赤道を挟んで大小、多数の島からなる国であり、南北のひろがりと同時に東西の広がりも時差を国内で2時間持つ国である。これはアメリカ合衆国の東西の距離に相当する。正に南国の海洋国家といっても過言ではない。この国は歴史的には350年のオランダの植民地として統治され、さらに日本軍の侵入を経てインドネシア共和国として独立したのは50年前であり、まだ国の形成としては全く新しいといってもよいのである。したがって行政的にみても不備なところがあり、また地方に行けば行くほど、うまく機能していない点は拭いきれない。このような社会状況でインドネシア政府の未開発地の東方開発計画が重要な開発目標の1つとなったことにより、本プロジェクトが取り上げられた。したがって本プロジェクトにJICAの技術協力がなされることはかなりの困難を強いられることになる。開発が進んでいる地方でも問題がある中、社会的にも未開発とされている地方の開発には資材、資金はもとより人材までも不足しており、また行政的な面からの実施体制、実施機能の貧弱さはどうしても避けられない事実である。さらに本件が農業農村総合開発と銘打っていることから開発計画も広範囲の分野をカバーしなければならないという難問もかかえている。

このような諸条件を考慮して技術協力は進められているが、これがあくまでも開発のモデルとなるよりは実例となって、以後の開発計画に参考とされれば本プロジェクトの目的は十分達成されるものとする。この為に報告者の任務として与えられた分野の仕事を通して、さらにプロジェクト実施の過程を十分把握する事にも努めた。この事業を通しC/P及び農民達が自分達で開発を進めていく力をつけることを望むものである。ここに3年間の任務の報告を行う。



# 目 次

はじめに

「農民組織強化」分野活動写真集

1. 案件の概要 .....	1
1-1 要請の内容及び協力の背景 .....	1
1-2 その他の関連事項 .....	1
2. 配属機関の受け入れ体制 .....	3
2-1 配属機関及び業務の形態 .....	3
2-2 カウンターパート .....	3
3. 活動内容及び業務実績 .....	5
3-1 業務実施計画 .....	5
3-2 農民組織強化担当分野内容 .....	7
3-3 実務実績 .....	9
3-4 計画の達成度 .....	10
3-5 農民組織強化とは .....	11
3-6 部族の特徴 .....	22
4. 技術移転活動の実際 .....	31
4-1 組織の形成と強化 .....	31
4-2 農民参加工事に伴う農民組織の育成と資金の積立 .....	34
4-3 農民グループの維持と資金積立制度の導入 .....	37
4-4 ミニ・プロジェクト .....	46
4-5 農民組織強化（ミニプロジェクト）の活動（1994年） .....	50
4-6 現地研究の実績と今後の計画 .....	53
4-7 プロジェクト関係組織の概要 .....	56
5. 農業開発における“参加型開発とプロジェクト維持”の現況と将来 －農業農村総合開発計画プロジェクトに携わって－ .....	65
FINAL REPORT .....	73



南東スラウェシ州  
農業農村総合開発計画  
「農民組織強化」分野活動写真集

西村美彦

## 1. 農村開発計画説明会



郡関係者とプロジェクトの関係者の会合  
(ティナンゲア郡)



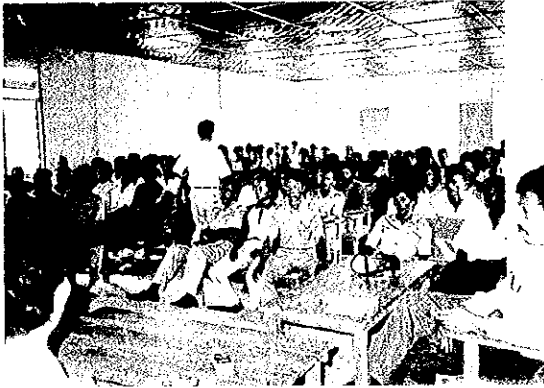
農民への説明会 開発の概要を説明する  
リーダー (パランガ村)



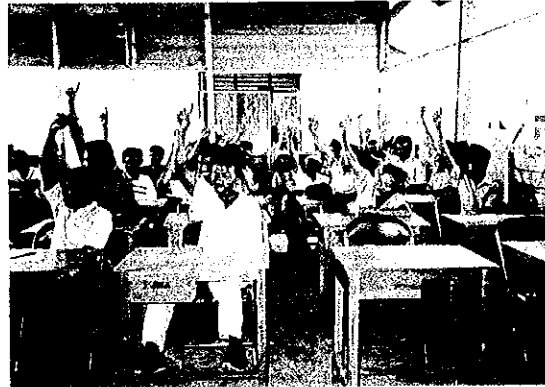
専門家、C/P、農民との会合、開発説明会  
(ラノメト村)



農民への開発計画説明会で意見を述べる  
女性村長 (キアエア村)



開発計画の説明会に集った農民たち  
(ラロバオ村)



開発計画の説明会で計画案に賛成した農  
民たち (キアエア村)

## 2. 農業基盤整備



プロジェクトで建設した農民集会場と  
普及員事務所 (ラノメト村)



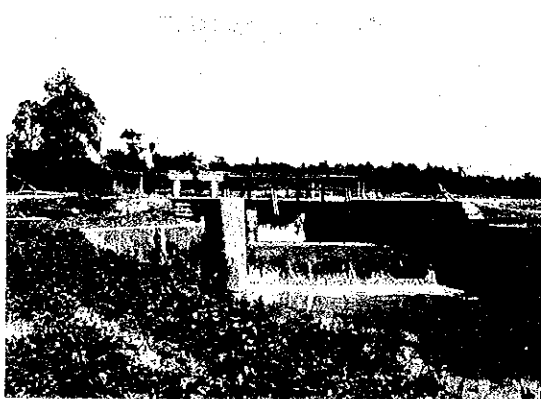
農民グループによる井戸の掘削工事  
深さは5 m前後 (ラノメト村)



基盤整備  
ローカルコントラクター請負による取水  
堰工事現場（パラंगा村）



基盤整備  
ローカルコントラクターによる取水堰工  
事現場風景（キアエア村）



完成した取水堰上に木橋を渡す  
（ラノメト村）



若者グループによる取水堰の見学  
（ラノメト村）

### 3. 農民事



水路の掘削工事は農民グループが請負い  
作業が進められる（ラノメト村）



水路工事現場で打合せをする専門家、  
C/P、農民たち（キアエア村）



水路の掘削は農民グループ毎に範囲が割  
り当てられる（キアエア村）



水路掘削がほぼ終了した農民グループの  
メンバーたち（パラंगा村）



水路掘削後、専門家、C/Pと共に工事の  
検査を行う（パランガ村）



専門家による工事情況調査(キアエア村)

#### 4. 農民グループによる積立金制度の導入 (ストックファンドシステム)



工事終了後賃金の支払いと、積立金を受け取る（キアエア村）



同左  
農民リーダーに説明するカウンターパート  
(C/P)（ラノメト村）

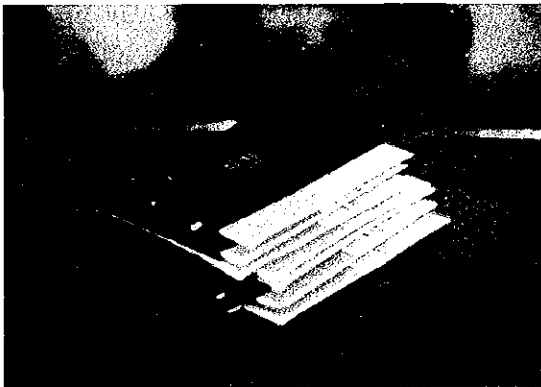




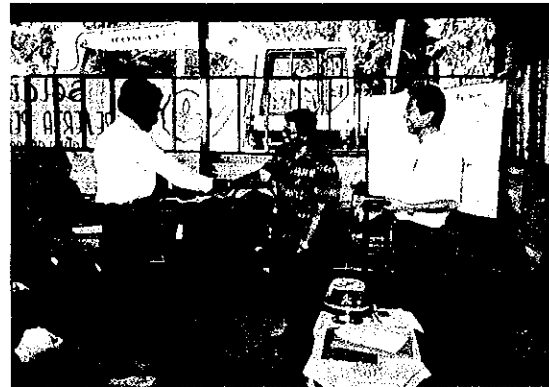
工事終了後  
積立金の受け取りと銀行口座開設の作業  
(ラノメト村)



農民から集められた積立金を銀行に持って  
行き口座を開設する。  
C/Pが初回業務を代行したが以後普及員  
が調整する。  
(クンダリの銀行にて)



各農民グループの積立金の貯金通帳  
農民グループのリーダーと農業省地域事務  
所長の2サイン(カウンターサイン)でお  
金を引き落とすことが出来る。



貯金された積立金は農業省地域事務所長  
の手で農民グループに貯金通帳として渡  
される。(ラノメト村)

## 5. 村における研修活動

(農民、若者、婦人研修)



農民グループリーダー研修であいさつをする郡長（パラంగా村）



農民グループリーダー研修、講義風景（ラノメト村）



農村婦人リーダー研修風景（パラంగా村）



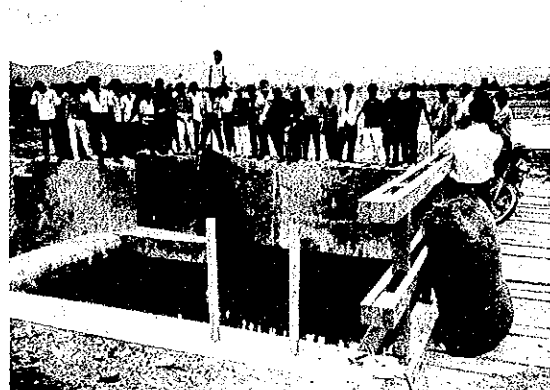
農村婦人リーダー研修  
子供の姿も見られる研修風景  
（ラノメト村）



農村生活向上研修  
ローカル料理の改善風景（ラノメト村）



農村婦人グループ研修  
カシューナッツの殻剥き実習風景  
（パランガ村）



農村若年層研修  
プロジェクトの取水堰視察（ラノメト村）



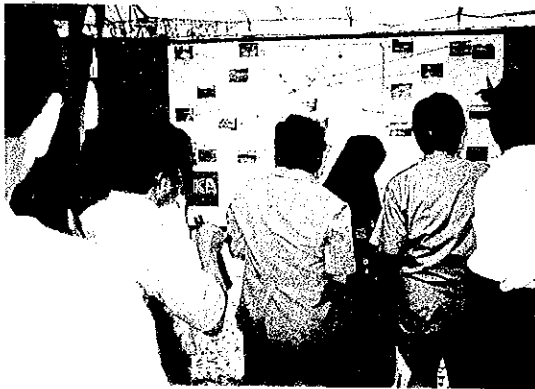
農村若年層研修  
トウモロコシ栽培、肥料実験の風景  
（パランガ村）



農村若年層研修  
マンゴーの接木実習風景(圃芸農場にて)



農業祭の展示場（バザー）の風景  
（ラノメト村）



農業祭  
プロジェクトパネルを見学している副県  
知事と農業省地方事務所長  
（ラノメト村）



開発セミナーのプレゼンテーション風景  
（政府関係職員対象）  
（クンダリ林業局会議室）

## 6. ミニプロジェクト活動



若者グループによるパパイヤの育苗  
(ラノメト村)



パパイヤ苗の配布風景 (ラノメト村)



若者グループによる養鶏導入  
(ラノメト村)



婦人グループによる庭先畑園芸の管理作業  
(パラング村)



若者グループによる落花生の収穫調査風景（パランガ村）



若者グループによるトウモロコシ栽培管理風景（キアエア村）

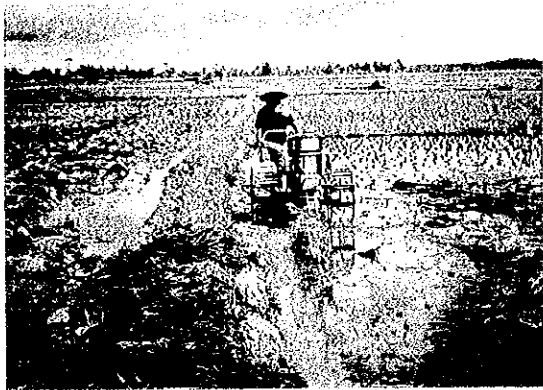
## 7. その他の活動



精米所開所式  
村長からKUD組合長に開設された精米所のカギの伝達式が行われた。(ラノメト村)



精米所の開業風景  
ラノメト村ではKUDによって経営された。(ラノメト村)



ハンドトラクタの農民グループへの貸し出し  
貸し出し料はオペレータと普及員によって徴取管理されている。  
(ラノメト村)



農民グループの技術力調査  
水稲のサンプリング風景  
C/P、農業普及員と共に坪刈を行う  
(ラノメト村)



共同作業  
水田のネズミ退治  
朝の作業で300匹を取った (ラノメト村)



共同作業  
灌漑水路の清掃風景 (ラノメト村)





## 1. 案件の概要

### 1-1 要請の内容及び協力の背景

本案件はインドネシア国政府の進めている地方農業の活性化及び貧困対策の一環としてとり上げられたものである。特に第2次25カ年長期計画及び第6次5カ年開発計画に継承されて、同国東方部開発の事例的役割も果たしている。元々は南東スラウェシ州前知事アララ氏が進めていたゲルサマタ(GERSAMATA)\*と称されていた村興しをねらいとした住民参加型の農村開発計画の一つが中央政府で取り上げられたものである。したがって本案件は村の中でも比較的貧しい村の開発を目的としてクンダリ県の8カ村を選定しモデル的に開発を実施するものである。

### 1-2 その他の関連事項

本案件は地方農業の活性化を求めているもので、事業として具体化されたものである。南東スラウェシ州はスラウェシ島の中でも新しく独立した州で開発が遅れている地区でもありこれといった産業もないため農村の開発に力を注いでいた。この中で農村開発にかかるデータの収集と計画策定、案件の発掘を州開発計画局がCIDAと協力して進められる中で、具体的な開発案件として位置づけられた。

\*GERSAMATA : Gerakan Desa Makmur Merata (A strategy of Integrated Rural Development)

# EXECUTIVE ORGANIZATION CHART

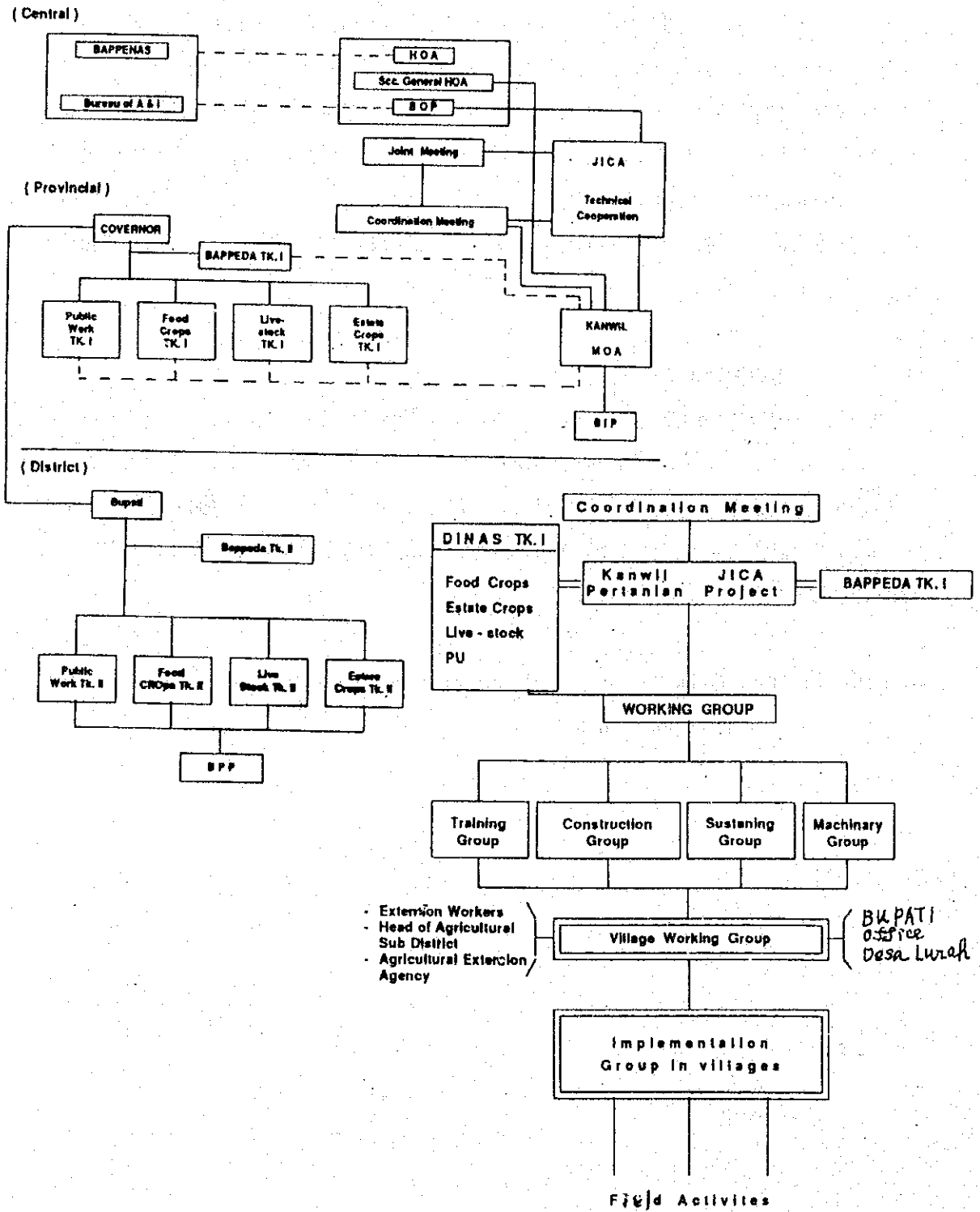


図1 プロジェクト関係機関図

## 2. 配属機関の受け入れ体制

本計画は中央政府で農業省案件として取り上げられ、この官房が受け入れ先となったが総合開発であるため幅広い省庁との関係が必要とされた。計画の実施元は農業省の地域事務所であるが、農業省の州事業事務所(DINAS)が関係した。また州の開発計画であるため州開発計画局がコーディネーション委員会の長として調整を行う形を取った。さらに農業土木工事が伴うため公共事業省地域事務所、村落協同組合の関係する組合省が加わるとともに県知事を中心とする部長、村長の内務省の行政機関も加わった。

当プロジェクトに関係する組織、関係者の詳細については別紙作成の“プロジェクト関係機関図”を参照していただきたい。(図1参照)

### 2-1 配属機関及び業務の形態

業務実施受け入れ機関は農業省南東スラウェシ州地域事務所である。この事務所の中でプロジェクトとして独立した組織を形成したもので、カウンターパートもいくつかの機関から出向してきた職員から構成された。したがって業務はプロジェクトを運営する全ての業務をカウンターパートと実施するものである。

### 2-2 カウンターパート

カウンターパート(C/P)の配属は1991年10月からであった。(専門家の当地着任は1991年8月であった。)

初年度はフルタイムC/Pとして Mr. Mappinangku (農業省地域事務所)

パートタイムC/Pとして Mr. Mansyur Azis (情報センター所長)

2年度は上記2名の他に1名追加されて、

フルタイムC/Pとして Mr. Bien Bangapdang (農業省地域事務所)

3年度はさらに1名追加されて4名となったが、内1名は日本でのC/P研修に参加、また1名は途中他の地へ、転勤となり実質2名となった。以下関係したC/Pである。

フルタイムC/P Mr. Mappinanguku (農業省食用作物地方事務所)

Mr. Andi Aria Pangerang (農業省地方事務所)

Mr. Bien Bangapadang (農業省地方事務所) 日本で研修中

パートタイムC/P Mr. Mansyur Azis (情報センター) ウジュンパンダン転勤

実施機関が、いままで実務的な事業を実施しなかった調整機関であったため、プロジェクト実施に伴う事業の経験を持っている人が少なく、かつ組織での権限を持っていない人が多く、事業を動かすことが大変であった。2年目の後半からシニアのC/Pの配属を受け、計画

の実施が容易になり、技術移転もスムーズに行われるようになった。

### 3. 活動内容及び業務実績

#### 3-1 業務実施計画

業務実施計画の作成に当たっては農業農村総合開発計画として分野が多岐に亘るため各分野間の関係を明確にする必要があった。そのためにも開発におけるプロジェクトの位置づけを明確にし計画を進める必要があった。すでにD/Rのなかでプロジェクトの内容は記載されていて、このR/Dに添付されているT/Rでさらに具体的な事業が示されている。しかしながら分野間での記載の内容に差がありプロジェクトとしての流れが明確でない。そこで再度計画の流れを見直すと同時に担当分野の役割を明確化させた。

##### 本プロジェクトの特徴

本プロジェクトは農業、農村総合開発計画であり、かつこの計画に地域農民を積極的に参加させて、実施することを目的としている。したがって大規模な施設の建設は行わず、小規模で効果的な農業基盤整備とその運用指導を行い現状よりやや程度の高い生産性を求め、農民のボトムアップを狙いとしている。この計画の主な要点は次のように要約される。

- (1) 農地整備を中心にした農業開発である。
  - 1) 村の未使用耕地(potential area)のモデル的造成（機械化造成）
  - 2) 水路、取水堰等の築造、改修、改善
  - 3) 水田、畑作、エステート作のモデル的开发（デモンストレーション）
- (2) 農地基盤整備以外の農業基盤開発事業
  - 1) 農道の布設
  - 2) 集会場、普及所等の建設
  - 3) 精米所、乾燥場、種子貯蔵庫、井戸、池等の築造
  - 4) 畜産も一部含めた農業開発
- (3) 農民参加を考慮した事業の実施
  - 1) コントラクター、プロジェクト直轄（直接雇用、農民グループ請負）による工事の実施
  - 2) 農民による末端水路の工事と管理
  - 3) 農民主体の建設地区の選定
- (4) 増産にかかる営農技術の改善
  - 1) 栽培デモンストレーション農場を通して営農のモデル作り（水田、畑作、エステート作物）
  - 2) 改善技術のトライアルと普及
- (5) プロジェクトの活動の維持を考慮した体制づくり

- 1) 農民組織への資金積立の奨励
  - 2) 精米所、ハンドトラクタ等の農民による管理運営
  - 3) 組織の育成（水管理組合、協同組合等）
- (6) 農村開発全体にインパクトを与える方式
- 1) 農民研修
  - 2) 婦人研修
  - 3) グループ活動の助成（ミニプロジェクト）
- (7) 小規模開発のモデル化
- 1) 対象村の特徴を生かした開発計画
  - 2) 河川流域単位、既存農民組織単位のモデル開発の拡大、活性化

これらの具体的な分野別目的に対してどのような形で日本の技術協力を展開すればよいのか考察してみた。

#### プロジェクト活動の構図とプロジェクト技術協力の協力体制

本プロジェクトはプロジェクト技術協力として取り上げられた案件である。このプロジェクトを実施するのに際し、それぞれの活動がどのように結びつき下位目標である農民の収益増収、生活向上にまで結びつくかを図式化した。特に日本側の予算の流れと活動の流れを整理し、より明確な流れを持つことが多種に亘る計画の場合重要である。このプロジェクトで最も大きな予算を使う建設は農地基盤とそれ以外の農業基盤付属施設であり、村の開発における農業インフラ整備の実施面で重要である。工事実施に当たってはコントラクターによる工事とプロジェクトが直接実施する工事とに分けられる。灌漑工事の一部はこの中で農民が行う労務提供型であるが、人夫賃支払いを行いこの内の一部に対して農民グループで資金積立を行い、グループの農作業の活動費に使用するのが特徴である。この経費はモデルインフラ整備費からの予算を使用し1村2,500万円くらいを目処にしている。またこれに伴う調査、設計、施工管理は技術協力で専門家とカウンターパートで行う。さらに直接工事では重機を導入して農地整備を行うが、運転手もプロジェクト直接雇用としているが、村の出身者を使い彼らに対する技術移転をねらっている。また供与機材はプロ基盤整備に必要なブルドーザ、バックホーを中心に多種の機材が導入された。しかしながら基礎整備は村全体をカバーする訳ではなく、あくまでも村の一部にしか過ぎないので、これをモデルと銘打って今後の村人の自助努力を期待するものである。整備された農業基盤上では展示圃でのデモンストレーション栽培を通し指導が図られる。同時に供与機材によってハンドトラクタ、スプレイヤ、スレシャ等の農機具が村に数台ずつ供与されるがこの機材の運営を通して資機材の維持管理、持続的運営を指導し農業改善を進めていく。一方灌漑整備が終了した時点で水利組合を発足、または強化させグループとして水管理を行い生産が上がるよう農民を指導す

る。また施設の修理等については労働奉仕、資金積立の利用により自力で施設維持管理が出来るようシステムを作成し指導する。農業の生産性を上げる直接の活動は営農指導、普及活動である。このために村に展示圃を開設しモデル的栽培方法を演示する。農民はこれを見て自分の田畑に同様な技術移転を行おうとするものである。村に供与されたハンドトラクタ等の資機材は村人から使用料を徴収し、これらの運営費と新規購入分積立、グループ活動積立金に当ててプロジェクトに持続性を持たせる。また村にすでに存在する諸グループにはその活動を強化させるために援助をし、また新規に活動が必要となったものにはグループの形成を援助し村の活性化を図る。特に次世代を担う若者グループ、家庭の改善を担う婦人グループに対してミニプロジェクトと称し活動を援助する。(図-2参照)

### 3-2 農民組織強化担当分野内容

上記のプロジェクトの目的に従い専門家の任務として農民組織強化を担当した。

プロジェクト活動の中でこの担当業務分野の実施計画内容は次の通りである。

#### (1) 農民組織調査

農業、農村インフラ整備を実施していく上で、農民の参加を可能とするために必要とされる村の行政機構、組織、農民等について調査を行う。併せて村の活動活性化の資料とする。

##### 1) 対象村

対象村の組織、機構、農民について、インフラ整備が開始される前に調査を行い、農民参加の導入計画を図る。

##### 2) 類似プロジェクト等

村に存在する先住部族、移住部族等を調べ、村の理想的な形成、村組織の強化に資する。併せて類似プロジェクトを調査し、村の開発の指針とする。

#### (2) 事業参加に係る組織育成・強化

インフラ整備事業に農民を参加させるための組織について、オリエンテーション、調整を図り実施の体制を作る。

##### 1) 組織作り

農民を事業に参加させるために必要な情報の提供及び組織化を図り、組織を育成する。

##### 2) カウンセリング

事業実施中における、組織の動向のモニタリングとガイダンスを行い、組織が円滑に動くよう導く。

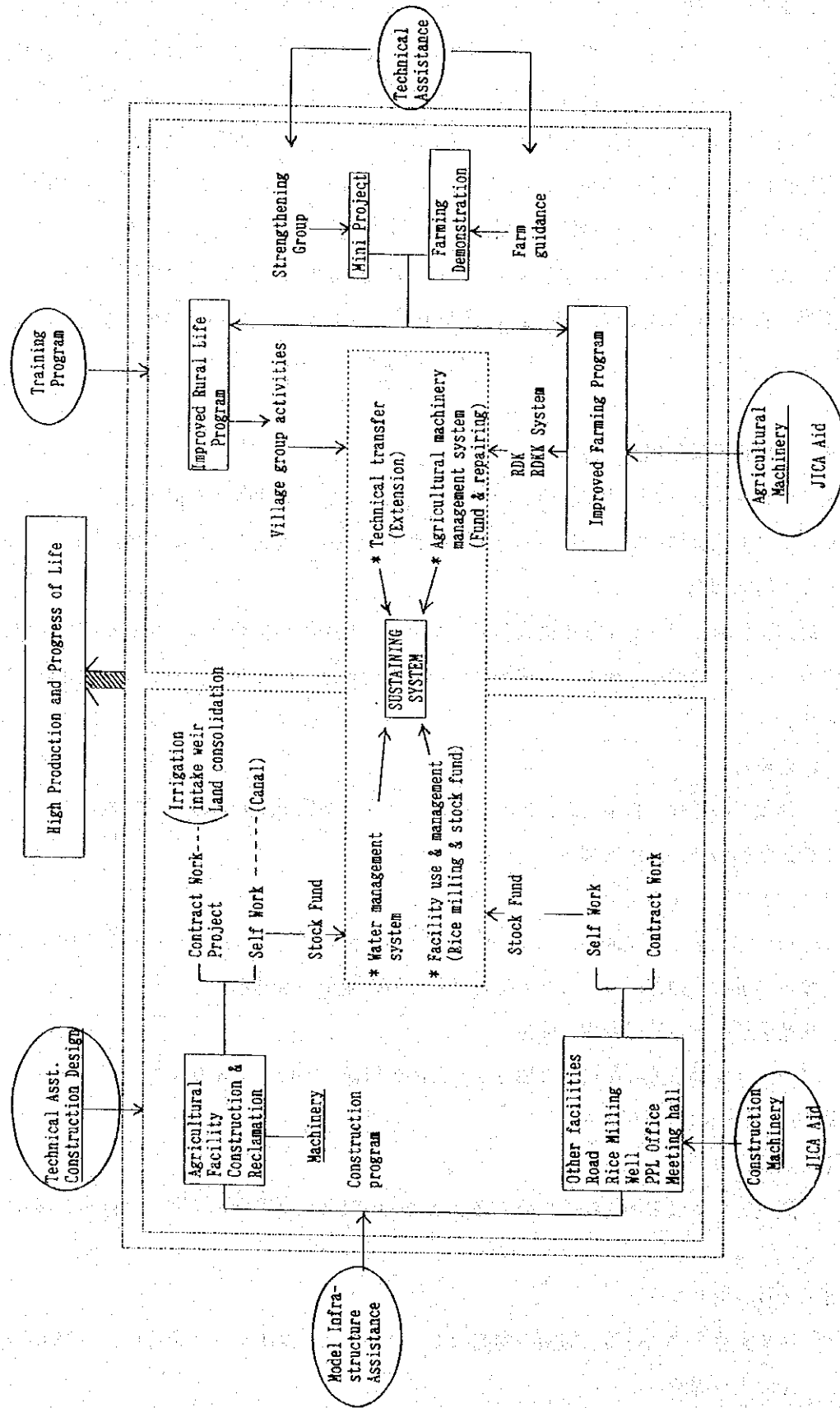


図2 プロジェクトの活動構図フロー



(3) 組織活動支援事業

農民組織及び関係機関等の活動強化と活性化を目的として、村のニーズに合った課題に付き、小規模な事業を行う。

(4) 中堅技術者養成研修による農民研修

1) 農民組織

- i. 組織強化（キーファーマー）
- ii. 農民婦人組織強化（キーパーソン、グループ）
- iii. 農村生活向上（キーパーソン）

2) その他のプロジェクト支援強化

- i. 農民若年層強化
- ii. 農業技術未熟者農家
- iii. 農業祭
- iv. 州外先進農業地視察

3-3 実務実績

上記による分類にしたがって活動の実績を記述する。

(1) 農民組織調査

1) 村の現況調査

農民グループメンバー調査

ラノメト、パラング、キアエア、ラロバオ、ラプル、ライネヤ、オネウィラ、サブ  
ラコア

農民婦人グループ

ラノメト、パラング、キアエア

農村若者グループ

ラノメト、パラング、キアエア、ラロバオ

2) 農村形成調査

i) 農業、農民組織調査

西部、中央スマトラ

西部、中央ジャワ

南部、東部カリマンタン

南部、中央スラウェシ

東部インドネシア（ソロン、ハルマヘラ、メナド）

南、南東スラウェシ（ブトン、ムナ島）

## ii) 農村調査

### 村の基礎調査

プロジェクト対象村、コントロール村の生産性調査

- a. 村の水稲収量調査（7カ村）
- b. 村の陸稲収量調査（4カ村）
- c. 村のトウモロコシ収量調査（2カ村）

農村婦人生活活動調査（プロジェクト村5カ村）

南、南東スラウェシ市場調査

## (2) 事業参加に係る組織育成、強化

### 1) 組織作り

農民グループの強化（ラノメト村、パランガ村、キアエア村、ラロバオ村）

### 2) カウンセリング

工事請負と資金積立（ラノメト村、パランガ村、キアエア村）

## (3) 組織活動支援事業

### 1) ミニプロジェクト

各村の若者グループ、婦人グループの活動に対する支援

### 2) その他の業務

ワーキンググループの創設

## 3-4 計画の達成度

上記計画に従って業務を実施したが、年毎の各活動の実績は別紙の通りである。他の分野の進捗状況によって農民組織強化分野の予定も変わってくるのでその都度調整が必要となる。特に施設の建設の完成度によって農民に対する活動スケジュールが変わって来る事になる。プロジェクト事業の進捗は、別紙実績行程表を参照されたい（全体計画と1994年8月15日現在）。

### (1) 計画の妥当性

#### 1) 期間

本計画は農業、農村総合開発のプロジェクトで8カ村を開発モデルとして5年間で実施するものであり、1カ村1年を掛けずに開発を完成させなければならない。したがって総合開発、農村開発と銘打っているため開発分野が広範囲に亘っていて、開発計画もまだ出来ていない中での協力ではとても5年間は短すぎる。

無償協力だけであれば可能性もあるが、人が参画し、技術移転を伴う技術協力となると1カ村1年でも難しい。

## 2) 規 模

農村開発であるが村全体の開発を考えた計画なのか、一部だけを考えた計画なのか不明であるため規模設定が難しい。また対象村の数も上記のように妥当であったか疑問である。

## 3) 内 容

総合開発計画として分野が多岐に亘るが、分野間の調整が少なく計画内容が時として計画名と似合わない場合がある。また分野間を埋める分野がないので村の総合開発を担当する人を置き、常に村レベルの開発を調整する必要があるだろう。

## 4) 方 法

縦割り社会の強いインドネシアで多くの関係省庁を持つことは、事業を複雑にし調整に手間取る。農業省地域事務所を受け母体として実施することはこの意味からすると妥当であったと思われる。ただ、もっと事業部との連携が必要であろう。

### (2) 受け入れ側の制約要因

上記したようにプロジェクトの受け母体が農業省の地域事務所である。このため事業の調整の権限だけで実際のプロジェクトを持っていないため当プロジェクトでは多くの制約要因を持った。まず第1にカウンターパートの問題である。やはり分野によっては適任者を得られにくい。第2に農業分野以外の機関との調整に手間取る。

### (3) 農民組織強化分野のプロジェクトでの役割

当分野は計画の中では非常に役目が不明確であり、具体的な活動が見えにくい。そこで“農民組織強化”分野の役割を明確にすべく下記の様に整理した。

(プロジェクト5カ年計画、農民組織強化の1993年、1994年計画を図-3に示した)

## 3-5 農民組織強化とは

当プロジェクトにおける農民組織強化事業とは、農村にある組織の強化を図り、または新しい組織を形成させて農民の積極的な農業開発への参加を促し(住民参加型)、人的農業基盤を作り上げ、農業収入の増大に結び付けようとするものである。

プロジェクトにおけるこの分野の事業の役割、働きについて整理し、まとめてみると次のようになるだろう。

### (1) 村に対するプロジェクトのインプットは

#### 1) 農業施設基盤の整備

i) 灌漑施設の整備

ii) 農地整備の一部

iii) 農道、橋の建設の一部

図3-1

インドネシア南東スラウェシ州農業・農村総合開発計画に係る5ヶ年実施計画

(2/3)

実施計画内容	経過年次 年 月	1年次 H3・4	2年次 H4・4	3年次 H5・4	4年次 H6・4	5年次 H7・4
III. 栽培及び農業技術の展示 1. 改良技術導入試験 2. 農業技術の展示・普及 1) 水 稻 2) 畑 作物 3) エステート作物		—	—	—	—	—
IV. 農民組織強化 1. 農民組織調査 1) 対 象 村 2) 類似プロジェクト等 2. 事業参加に係る組織育成・強化 1) 組 織 作 り 2) カウンセリング 3. 組織活動支援事業		—	—	—	—	—

(備考) : ———— ; ラノメト村、————— ; パランガ村、————— ; キアエヤ村、————— ; オネウイラ村、  
 ; ラノバオ村、————— ; ラエヤ村、————— ; オハラコア村、————— ; その他

図3-2

実施計画内容	経過年次		1年次		2年次		3年次		4年次		5年次	
	年	月	H3・4	H4・4	H4・4	H5・4	H6・4	H7・4	H6・4	H7・4	H6・4	H7・4
V. 政府等関係職員、中核農民及び農民グループ研修												
1. 農業・農村開発計画												
1) 農業・農村開発計画												
2) 農地造成												
3) 農業機械操作・整備												
2. 営農計画及び栽培(営農栽培技術)												
1) 水稻栽培												
2) 畑作物												
3) エステート作物												
4) 多角的集約営農												
5) 水管理												
3. 農民組織												
1) 組織強化												
2) 農村婦人組織強化												
3) 農村生活向上												
4. その他プロジェクト支援強化												
1) 農民若年層研修												
2) 農業技術未熟農家研修												
3) 農業祭												
4) 州外先進地視察研修												

(備考): ———:ラノメト村、————:パランガ村、————:キアエア村、————:ラロバオ村、————:ラエア村、————:ラアル村、————:オネウイラ村、————:サブラコア村、————:全般



図 3 - 4 1994年(8月15日現在) (7/7) 備考 (実施済み対象村)

活動内容	月												備考	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
3. 継続活動支援事業														
1) ミニ・プロジェクト事業 主な事業 : 養蠶、果樹育苗、野菜栽培、小規模園場管理、 丘陵地造成調査、おフェック加工、食卓の改善等														
(1) ラサト村 : 農民組織、農村婦人組織、若年層農村組織等 (農民(作付体系)、婦人(ワカガリ野菜)、若者(養蠶))	+++++	+++++	+++++	+++++										
(2) ハラガ村 : 同上														
(3) 打田村 : 同上 (若者(野菜))														
(4) ラカ村 : 同上 (農民(ワカガリ))														
(5) ラガ村 : 同上														
(6) ラ田村 : 同上														
(7) ララ村 : 同上														
(8) ラ村 : 同上 (農民(ワカガリ))														

備考 : =====; 57年詳細計画、-----; 実行計画、+++++; 実施済み

図 3 - 5

1993年度

(5/6)

活 動 内 容	月												備 考 (実施済みの対象村)
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
IV. 農民組織強化													
1. 農民組織調査													
1) 対象村													
(1) 701イ、771村に於ける農民組織実態調査・取集及び分析													
2) 類似701イ等													
一 南・中央5カ所、南・西7カ所、771等に於ける農民組織実態調査 (調査内容)													
(1) 伝統稲作農村及び近代稲作農村社会調査													
一 南東7カ所/南・西7カ所/													
(2) 畑作及び稲作農村社会調査													
(3) エアト作農村社会調査													
(4) 771・狩猟農村社会調査													
一 南東7カ所/南東7カ所/													
2. 事業参加に係わる組織育成・強化													
1) 組織作り													
(1) 701イ、771、701イ、771村に於ける農民組織、水利組合 (P3A) 協同組合 (MID) 及びその他組織作り													
2) カウセリング													
(1) 701イ、771村に於ける農地造成事業と基金701イ及び関連事業に対する指導													
3) 機械施設及び組織活動維持													
(1) 701イ、771村に於ける精米施設、脱穀機、二輪トラクター、乾燥機等の維持管理													
(2) 701イ、771村に於ける精米施設、脱穀機、二輪トラクター、乾燥機等の維持管理													

備考: =====; 57年詳細実施計画、-----; 実行計画、+++++; 実施





- iv) 灌漑用池の掘削
- 2) 農業付属施設の建設
  - i) 精米所、乾燥所の建設
  - ii) 種子貯蔵施設の建設
  - iii) 井戸の掘削
  - iv) 牛の飼育施設
  - v) 家畜市場の設置
- 3) 機材の投入
  - i) スレシャー
  - ii) ハンドトラクタ
  - iii) スプレイヤ
  - iv) ポンプ
  - v) その他
- 4) 農民訓練
- 5) 小資材

(ミニプロジェクトで補助する材料)

これらのインプットを投入して農業開発、発展にどの様に組織の活性化、組織の活用を図ったらよいであろうか。この事業を実施するのに際し、プロジェクトで与えるこのためのインプットと村内の組織の活動及び役割を図4に整理した。

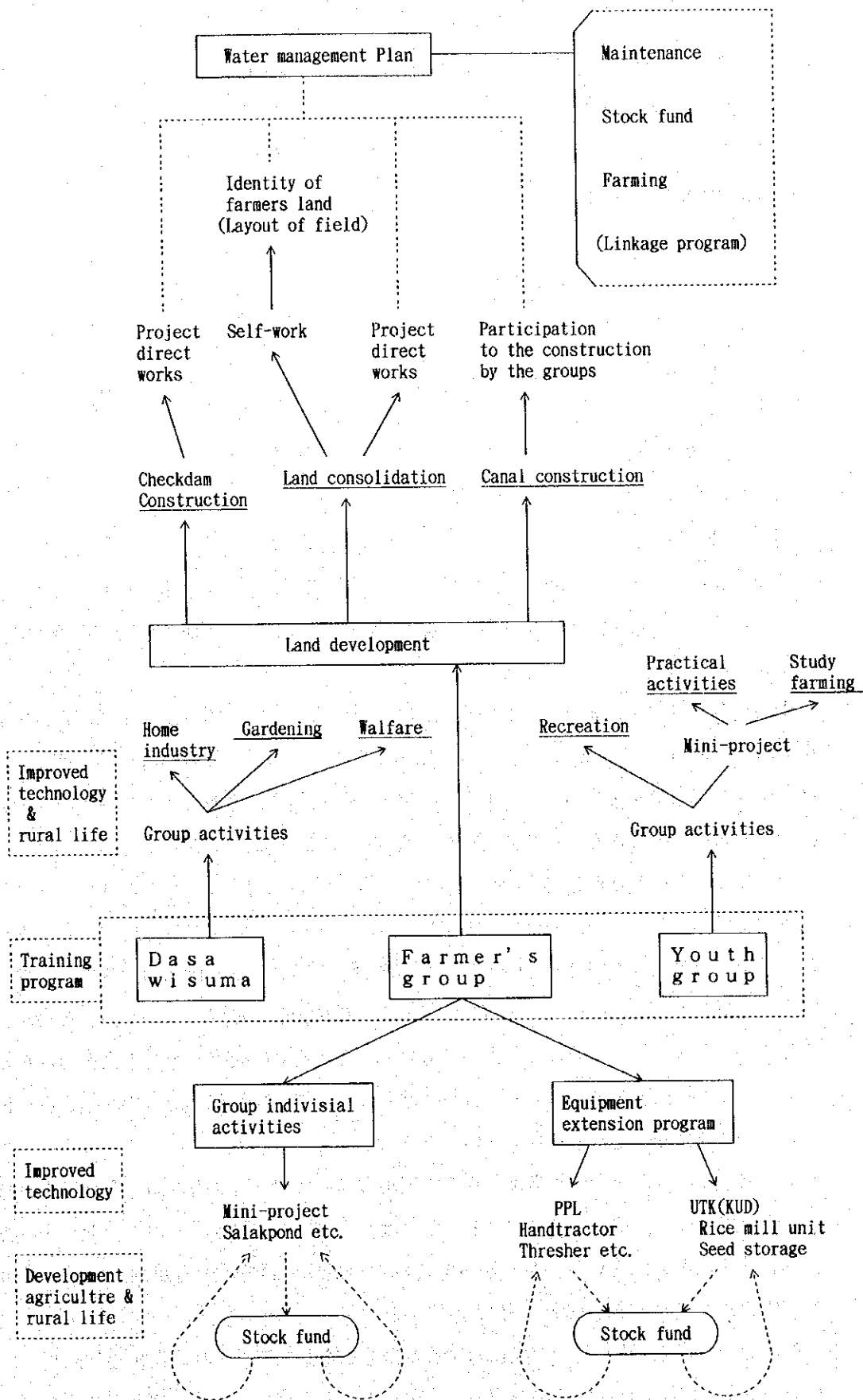


図4 農民組織強化活動図

(2) そしてここでの指標となるアウトプットは次のようなものになる。

- 1) 現状組織の改革（強化）
- 2) 新組織の形成
- 3) 組織の活動の活性化
  - i) 活動事業
  - ii) コーディネーション（組合員と事業）
  - iii) 人材の育成
  - iv) 資金の蓄積
- 4) 効果
  - i) 技術
  - ii) 資金
  - iii) 管理／取り組み

これらはいくまでも間接的な役割であり、この効果がプロジェクト効果としての最終目的である増産、収入増につながり、農民のボトムアップ、貧困からの脱却に役割を果たし得たかである。

他方それでは農業開発を行うということはどういうことであろうか。量的開発、質的開発など考え方はいくつかある。ここではあくまでも他の村よりも遅れている農業を発展させて、農業増産を図ることである。そのためには増産に必要なインフラ整備、改良技術、適正技術の導入とこれに伴う組織化を図り増収に貢献することである。

それでは、この増収を図るためには何を（どのような技術を）、どのように、誰に与えるのであろうか。そのためには、まず村の現状の技術レベルを知る必要がある。またこの技術の将来性（方向性）を確認しておく必要もある。つまり村における現状分析を行うことである。これを行って、何が（どのような技術が）増収に有効であるかを検討することである。このためには技術そのものと、これを受け入れる社会組織を知る必要がある。つまり技術を導入してもこれを受け入れる（取る）側が、拒否や消化不良を起こしては技術移転の定着は有り得ないのである。

それぞれの地域の社会、組織は多くの要因から成っており歴史的な面も含め民族の要因は無視出来ない。特にプロジェクト対象村は多くの民族が混ざっており、トラキー族以外は移住民とされている。したがってこれらの民族の間では融合が進んでいるものの、依然として民族独自の社会が保たれている。

そこで、まず各民族が持つ農業に対する背景を調査してそれぞれの指標を作成し、これを基に導入技術を検討する必要がある。次にこの点につき今までの調査とデータから考察してみたいと思う。

(3) 当プロジェクトの農村はインドネシアの中でも農耕としての歴史は比較的浅く、技術的にも遅れた地域とされている。この状況は政府の掲げた東部地区開発政策の一部に南東スラウェシ州も入っていて、プロジェクト導入の必要性があったことから分かる。プロジェクトの開発対象となっている農村は先住民だけの村とは限らず、ジャワ、南スラウェシ、バリなどからの移住民も混ざっている。またプロジェクト内の移住民の多くはスポンタンとよばれている自主的移住農民であり、ラノメト村のように戦前から入っている地区や、パラガ、キアエア村のように1980年代に入ってきたまだ比較的新しい村の場合もある。村の開発は構成される農民の考え方によって大きく左右されることは言うまでもない。村の自然条件と社会的条件を考慮した開発が望まれるところであるが、とりわけ本プロジェクトは村の人的資源の開発が重視されていることから、上記した民族の特徴を知ることは意義があるのでこれについて記述したい。

#### 1) 村の概要と基礎データ

村の概要、社会、経済、インフラについてはハルウレオ大学で1991年に調査し、まとめたものがある。これは各郡で出しているデータを基にしてプロジェクト対象村の8カ村の経済、社会的データをまとめたものである。そして村の経済データを基に所得の公平、不公平さを知るジニー係数を算出し村間の所得分配率を調べている。また経済分野では短期専門家により村の経済分析がなされる予定であり、すでに現地に合った調査方法の指針がなされている。

#### 2) 各村の民族(部族)構成

各対象村における部族の構成を調べることにしたが、村役場ではこの様な資料は見つからない。人口、世帯数、職業などについてはそれなりにデータを取っているが詳細のものはない。そこで農民組織調査の過程から農民グループメンバーのデータを整理した際部族も調べた。農民グループは土地の所有区分でグループ化したものであるためグループのメンバーが必ずしも村民であるとは限らない。また1人で数か所の田、畑を持っている場合は夫々のグループのメンバーともなる。また息子に一部相続させて名前が変わっている場合等もあるが一応村の農業に関する基礎的なものとして目安にはなる。

村の農民グループの概要は全メンバーのデータを集め、一つの資料としたのでこれを参照されたい(別冊: 8カ村の農民グループ調査)。またこれを基に村の特徴を横断的に調べることが出来た。

#### 3) 農村婦人の生活調査

村の人々の生活実態を知るために婦人からの情報をまとめ指針とした。方法はトレーニングに参加した婦人達にアンケート用紙を配布し生活実態を記入させたものを

整理した。この調査は女性の開発参加に対する資料となるだけでなく、生活水準の程度、食生活、労働の実態などを探るために参考になった。調査はラノメト村、パラング村、キアエア村、ラロバオ村、ラプル村の5村ですでに実施して報告書にまとめているので参考にさせたい。

#### 4) 村の自然、地理的条件

対象村の自然、地理的、環境に関するデータは州開発 (BAPPEDA) により1992年に8カ村の土地利用調査がなされ、報告書が出されている。郡レベルの調査は1989年に実施され報告書が出されているが1992年の村調査の方がより詳細である。

上記の調査結果は事業を進めていく上で非常に参考になる。そこで対象8カ村の村の特徴と概要を要約したので参考にされたい。

### 3-6 民族の特徴

これまで述べてきたように当プロジェクトの対象村には先住民だけでなく移住民もかなり多く居住している。そこで何らかの形で部族間の特徴を知ることは村の開発を考える上で参考となる。しかしデータから各々の民族の違いを示すことは非常に難しいことであるが、あえてこの点について我々の目からみた違いについてまとめてみたい (表1参照)。

民族	トラキー	ムナ	ブトン	ブギスマカサル	トラジャ	ジャワ	バリ
先住地	南東スラウエシ	ムナ島	ブトン島	南スラウエシ	南中スラウエシ	ジャワ島	バリ島
環境条件	湿地/山岳	海洋/島 (丘陵)	(海洋/島) (丘陵)	海洋 (水田-丘陵)	山岳 (盆地)	低地/丘陵	丘陵
農業	焼畑(陸稲、粟) サゴ カカオ カシューナッツ	焼畑 (トウモロコシ 粟) カシューナッツ ラタン チーク	焼畑 (トウモロコシ ヤム、ソルガム) キャッサバ ココナッツ カシューナッツ	畑作 (陸稲、粟) 水田 チョウジ コショウ	畑作 水田(湿地) 野菜 コーヒー	畑作(混作) 水田(灌漑) サトウキビ 大豆 複合農業	水田(灌漑) ヤシ 果樹
慣習、文化	小王国 山岳民族 輪(カロ) の文化 原始宗教から イスラム	王国 海洋民族 原始宗教から イスラム	王国 海洋民族 双子社会 イスラム	王国 海洋民族 恥じ(シリ) の文化 双子文化 イスラム	小王国 (特徴文化) 山岳民族 原始宗教 天、中、地の 神から、 プロテスタント	王国 (特徴文化) 農耕文化 ヒンドゥーから イスラム	王国 (特徴文化) 農耕文化 ヒンドゥー
社会/家族制	一夫多妻 血縁社会 分散型家族	一夫多妻 血縁社会 分散型家族	一夫多妻 血縁社会 大家族制	一夫多妻 自由移動 分散型家族	家長主義 弱いカースト	血縁社会 カースト制	大家族制 血縁社会 職業分化
特徴	素朴さ 自然との調和	素朴 貿易交流	素朴 貿易交流	開放的 商業主義 パイオニア精神	素朴 組織力 自然との調和	緻密性 組織力 社交的	開放型 組織力 文化的誇り

表1 南東スラウエシ州先住民族と移住民族

(1) 8カ村の概要

1) ラノメト村

村名は黒い湿地（トラキー語）

- \* トラキー、ジャワ族中心の農村で古くからジャワからの自主的移住が行われていた。すでに入植から2～3世代経ている。
- \* 湿地に広がる水田とサゴ林、丘陵地のカシューナッツ等のエステート作物が中心となる。
- \* 都市近郊であるための新しい社会が進み出した社会構造の変化の見られる地域で農家の兼業化が進んでいる。
- \* ジャワ人の居住は1959年からで、元は1937年に日本軍に連れて来られてラハ、コラカ等の南東スラウェシ州に住んでいた人たちが移住してきたものである。

2) パランガ村

村名は人の集まる所（トラキー語）：クンダリ、テイナンゲアの中継点で人が立ち寄る所

- \* トラキー、ブギス中心の農村で7年前にブギスが集団で（スポンタン）入植して来た、比較的新しく民族が組み合わせられた地域である。しかしその前に数人のブギス人はすでに住んでいた。
- \* まとまった水田（低地）を持ち丘陵の窪地に水田が点散する。また北に丘陵地を控えカシューナッツのエステート畑が広がる。
- \* 村長が旧家の後継者であり、また入植者はその親から土地をゆずってもらったため、村長の村での権限は絶対的なものがある。
- \* 水利に難点があり、乾燥期の水問題の解決が必要とされる。したがって飲料水確保にも問題がある。

3) キアエア村

村名は美しい村（トラキー語）

- \* トラキー、ブギス中心の農村でパラंगाと同様な条件である。（以前は同じ村であった）
- \* 小丘陵地帯の畑作と窪地、小河川に作られた水田が耕地の代表である。
- \* 村長は女性で郡長、パラंगा村長婦人とはいとこで、この辺の旧家の家系にはいる。

4) ラロバオ村

村名はラタンの森（トラキー語でラタンの多いところ）

- \* 先住民のトラキー族だけからなる村で、水田耕作を数回やっただけの水稲栽培の経



験の少ない村である。

- \* 東側に丘陵地を持ち、道を挟んで西側には河川流域に低地が広がる。
- \* 農民は畑作（陸稲、メイズ等）、サゴ農業などで生活している。
- \* 昔はラタンの切り出しで収入を得ていたが、今では森にラタンがなくなりほとんど生産ができなくなった。
- \* この村は小さな集落(dusun)3つがまとまって1979年に村となった。

#### 5) ラプル村

村名はラプル川由来—トラキー語でラプルとは短く川を切ることである。

- \* 先住民のトラキー族と古くからスポンタン（自主的移住）で入植しているボネからのブギス族そしてマカサル、バリ及び1世帯のジャワ族から成る村である。特にブギス族はティナンゲアに早くから移住しており漁業、水田を営んでいる。
- \* この地の先住民は以前は畑作とサゴ農業で暮らしていた。畑作には陸稲を中心にメイズ、野菜を作っていた。水田はなくオランダが陸稲の種子を配布しても食用にできませんでしたと言う歴史をもつ。
- \* 最近では1981～2年にバリからの入植者が近くで水田を開いたこともあり、今の村長の指導で1985～86年にかけて池の築造を行った。この作業はトラキー、ブギス、ジャワの混ざりでスワダヤ式ゴトンロヨンで行われた。しかし後になって労働省の雇用促進対策の補助金を得た。
- \* 現在は水田、畑作、エステートが多く見られる地区である。
- \* 上記の農民の他に漁民としてのワジョ族70世帯が主に海上生活を行っていて、農民グループは形成していない。
- \* 村の入り口に1981年から5年間ベルギーのプロジェクトで畜産開発を行ったセンター跡がある。現在は建物だけが残っている。

#### 6) オネウィラ村

村名は白い土（トラキー語）

- \* ラノメト村に隣接する村で、やはり湿地が広がる。現在サゴ椰子林の中に20～30haの水田が出来ているだけである。雨期には全面水に浸かる。
- \* 白い土といわれるように湿地であるが乾くと白い土が現れる。これは湿地特有の土で二酸化鉄やマンガンが流れたためにシリカ、石英だけが残ったものである。そのため湿地の排水改良が農地開発には必要となるが、抜きすぎると灌水の必要性が出てくる。また保水力も弱く、有機質がすくないので肥料を必要とする。
- \* この村はトラキー族（村民の98%）からなる村で、僅かにブギス、ムナニス、プトニス、南スラウェシの人が入っている。全世帯数163戸、人口800人からなる小さい

村である。またサゴ椰子林がまだ残る水田の開発可能地を多く残した村である。住民はやや小高い道沿いに住んでいる。

#### 7) ラエア村

村名はラエア川からの由来、トラキー語でラ(La)は存在する、エア(eya)は細切れを意味するがラエアとしての意味はない。

(なおライネア郡の意味はinea(palmの一種)の木が有るところという意味であり、郡長所在村のポンガルク(Punggaluku)村はココナツの木という意味のトラキー語である。)

\* 割合と大きな川沿いに開けた村であり、村の中心部には水田は発達しておらずサゴヤシ林、畑地(トウモロコシ、陸稲、大豆、キュウリ)、荒地が多く、エステート作物(ココナツ、カカオ、カシュナツ)、畜産の開発のポテンシャルティが高い。

\* 村はずれに家畜市場を持ち、この周辺は家畜の売買の中心となっている。

\* 村民はほとんど先住民のトラキー語であるが、1982年にシンジャイからブギス族がスポンタン(自主的移民)として入植し、今では約10%を占めるようになった。

(1993年現在、トラキー230世帯 916人、ブギス31世帯 101人)

\* 村民の主食はサゴと米である。これらは共に村では十分生産されないため、トウモロコシ等生産物を買って、主食を買っている。

#### 8) サゴラコア村

村名は中継所(トラキー語)-subuは場所、lakoahは中継という意味である。

\* 元々は森のひろがる土地で、ムナ族、南トラキー族がコラカまたは北へ移動する時に中継地として通った場所である。

\* 現在この村は4つの地区(dusun)に分けられていて、将来夫々独立した村になる可能性を持っている。中でもワトワト地区はすでに村長代理を置いている。これらの4地区は、

i) サブラコア中心部：村事務所、学校等があり、トラキー族が中心である。

ii) ワトワト地区：村の入り口の地区でトラキー族が中心である。

iii) サブラコア I：国営入植地で150世帯が入植3年目を迎えている。

iv) サブラコア II：I 同様国営入植地である。150世帯の入植。

\* 旧村落の住民はほとんど先住民のトラキー族である。

\* この村で国家移住計画が実施されたために、村の区分が変わりつつあり将来移住地と旧村落との2村以上に分離する予定である。このため当プロジェクトの対象は旧部落のワトワト地区となる予定である。

- \* この地区は丘陵地帯で住民は196世帯全てトラキー族である。しかし最近25世帯のブギス族が住み始めているが、公式にはまだ数えられていない。
- \* このトラキー族の主な農業はサゴデンプンの抽出、カシューナッツ栽培、焼畑のトウモロコシ、陸稲、大豆の栽培が主である。また水田については湧水のある河川からの導水により小規模灌漑が可能であり、水田の開墾が僅かながらも独自に進み出している。
- \* サブラコア村全体の世帯数は旧部落320世帯で移住地2地区で300世帯となった。移住地の入植者は一地区150世帯でその内30世帯は地元の人を入植させている。サブラコアIの場合ジャワ780世帯、バリ40世帯、トラキー30世帯と入植しており、ブギス15世帯が別途直接土地を買って独自に入植している。この入植地は丘陵地帯で水田はない。
- # なお蛇足ではあるが、クンダリ(Kendari)の語源については“Kandai”から来ているとされている。いまもクンダリ市のコタ(旧市内)にカンダイという地区名が残っている。トラキー語でKandaiの意味は舟を漕ぐときの竹の“竿”であるという。つまりクンダリはこの“カンダイ”をオランダ人がクンダリと呼んだ事に由来する。

## (2) プロジェクト8カ村の詳細データ

8カ村の基本的データを表2-1、2-2に取りまとめた。データは1993年現在のもので村、郡役場のデータや農業普及員からの聴取りでまとめたものである。

表2-1 村の基礎データ

Item / Name of Village	Ranommeto	Palangga	Kiaea	Lolobao	Lapulu	Laeaya	Sabulakoa	Onewila
1. Population	1,808	1,427	1,275	660	1,340	1,006	1,301	787
2. Man	914	732	634	309	662	485	653	408
3. Woman	884	695	641	351	678	521	648	379
4. Household	326	286	281	120	240	235	355	176
5. Farmers	302(312)	264	271	108	167	177	335	126
6. Other jobs	13	22	15	6	73	30	69	41
7. Density (person/km <sup>2</sup> )	115.2	26.2	30.8	7.6	19.5	40.6	40.9	66.6
8. No. of farmer groups	11	13	11	5	7	6	5/14	5
8-1 Food crops	11	14	11	5	7	7	10	5
Members	205	396	340	103	300	137	256	56
8-2 Livestock	4	1	-	-	3	4	2	2
Members	-	-	-	-	-	-	25	-
8-3 Estate crops	1	-	-	-	-	-	2	3
Members	-	-	-	-	-	-	60	-
9. No. of farmers woman group	1	4	7	1	5	1	1	9
10. Member	27	91	182	38	88	25	15	108

表 2 - 2

Name of Village	Ranometo	Palangga	Kiaeya	Lolobao	Lapulu	Laeya	Sabulakoa	Onewila
11. No. of youth farmer group	3	2	3	1	-	-	1	-
12. Member	25	55	87	28	-	-	27	-
13. Other groups (Dasa N. etc)	DS 14	DS 17	DS 9	DS 9	DS 11	-	DS 10	1
14. Member								
15. Water user's association	2	-	-	-	local 3	-	1	-
16. Member								
17. KUD (Cooperation)	1	-	-	-	-	-	1	-
18. Memembr								
19. Ethnic of farmers group	146	332	251	115	172	122	147	62
19-1 Tolakinese	71 (48.6%)	158 (47.6%)	186 (74.1%)	115 (100%)	58 (33.7%)	98 (73%)	142 (3.4%)	62 (100%)
19-2 Javanese	54 (37.0%)	25 (7.4%)	-	-	-	-	-	-
19-3 Buginese	4 (2.7%)	144 (43.4%)	65 (25.9%)	-	90 (52.3%)	33 (27%)	5 (96.6%)	-
19-4 Torajanese	12 (8.2%)	-	-	-	(Balinese)	-	-	-
19-5 others	5 (3.4%)	5 (1.5%)	-	-	24 (14.0%)	-	-	-



## 4. 技術移転活動の実態

“農民組織強化”専門家の活動は上記した役割の中で調査の方法、実際の事業の進め方、強化の方法に付き、カウンターパートへの技術移転を通して実施した。

### 4-1 組織の形成と強化

#### (1) 農民グループ

前記したように農民グループは各村の水田所有を中心としたまとまりでグループを形成している。しかし水田のない村では畑地、エステート畑をまとめて組織化を図っている。

##### 1) ラノメト村

同村の農民グループは低地部の水田が広がる地区に出来ている。プロジェクト開始時は9農民グループがあり、トラキー、ジャワ族、の農民グループにブギス、トラジャ族が混ざったグループとなっていた。水路工事が終了し、開田が進んだ時点で農民グループは11グループとなりプロジェクトが農地整備を行った圃場を持つ2地区が新たにグループとして独立した。

##### 2) パランガ村

同村には13の農民グループがあり内、3グループは国家移住計画の入植のためあと2年は移住省の管轄となるためプロジェクトの活動はここでは行わない。プロジェクトの対象となるのは10農民グループで内、同じ水係りの灌漑を施した水田を持つのは6グループである。他のグループは僅かに点在する水田だけで主に陸稲、トウモロコシ等の栽培を行う畑地、カシューナッツ、カカオ等のエステート園を所有するグループである。プロジェクトの農地整備が対象となったのはこの内、水田が集中する6グループである。これらのグループはブギスを中心とするものとトラキーを中心とするものがあり、混ざった状態である。また水田以外はトラキーのグループでデモンストレーションとして畑地、エステート畑の開畑を一部で実施した。プロジェクト工事が終了した時点で村ではグループの名前を全て改名した。

##### 3) キアエア村

プロジェクト開始前は9グループであったがプロジェクト活動が開始するのにしたがい2グループ増え11グループとなった。低地部が水田となって点在するため水稻栽培は4グループで中心に行われていて、他は僅かの天水田と丘陵地の畑作、エステート圃場が主なものとなっている。部族はパランガ村と同様西側水田地帯にブギスが入り、他はトラキーとなっているがスワダヤで作った取水堰からの導水でトラキーグループも水田の耕作を始めだした。

#### 4) ラロバオ村

現在グループはプロジェクトが行う水田の農地整備地区に5グループある。しかしながらスワダヤの独自で行った灌漑施設が崩壊した後は、水稲栽培は実施されずグループとしての活動は弱い。しかしプロジェクトの導入と共に水田に対する関心が高まってきた。水田以外は丘陵地で陸稲、エステート作物栽培が中心となっている。この村民は全てトラキーである。

#### 5) ラプール村

村は海岸に面し、いくつかの河川を持ちその流域に水田が広がる。グループはその水田耕作地を中心に現在9グループが形成されている。プロジェクトが実施する灌漑計画地にはまだ組織は形成されていない。この村のグループはトラキー、ブギス、バリの人たちが主要民族となっている。

#### 6) ラエヤ村

この村には水田がほとんど無く最近、僅かに入植したブギス人が2~3人水稲栽培を始めたにすぎない。しかしながら水田としての開発可能地は100ha以上あるといわれている。農民グループは畑作、エステートを中心としたもので活動は弱い。ただ他の村に比べココナツ油の搾油が多く、また畜産市場を持つこと等から水田以外のグループ活動を活性化する必要が出てくる。

#### 7) サブラコア村

同村は大きく3地区に分けられるがプロジェクトが開発の対象としているのはこの内、旧ワトワト地区である。ワトワト地区は全てトラキー族で水田は最近少数の人が始めたところでまだ農地整備、灌漑整備はされていない。したがって現農民グループは水田所有としての活動は行っていない。今後プロジェクトが、実施する灌漑農地整備によりグループの活動がはっきりするものと思われる。

#### 8) オネウィラ村

現在この村には水田が湿地部にわずか数十haあるだけで灌漑等の施設はない。そのため農民グループは5グループあるものの活動は弱い。グループの多くはサゴ採取と陸稲栽培に関するものとなっている。今後水田の整備によって活動が活発化するものと思われる。グループのメンバーはほとんどトラキー族である。

上記8カ村のうち農業基盤整備の終了したラノメト、パランガ、キアエア村については水田における水利用、水路管理等の仕事が必要なため、水利組合を組織し農民グループの活動を強化した。

以下それぞれの組織の業務を記載する。



Fig. STRUCTURE ORGANIZATION OF ESTABLISHMENT FARMER USER WATER CLUB (P3A) (Example P3A in Wawotobi project)

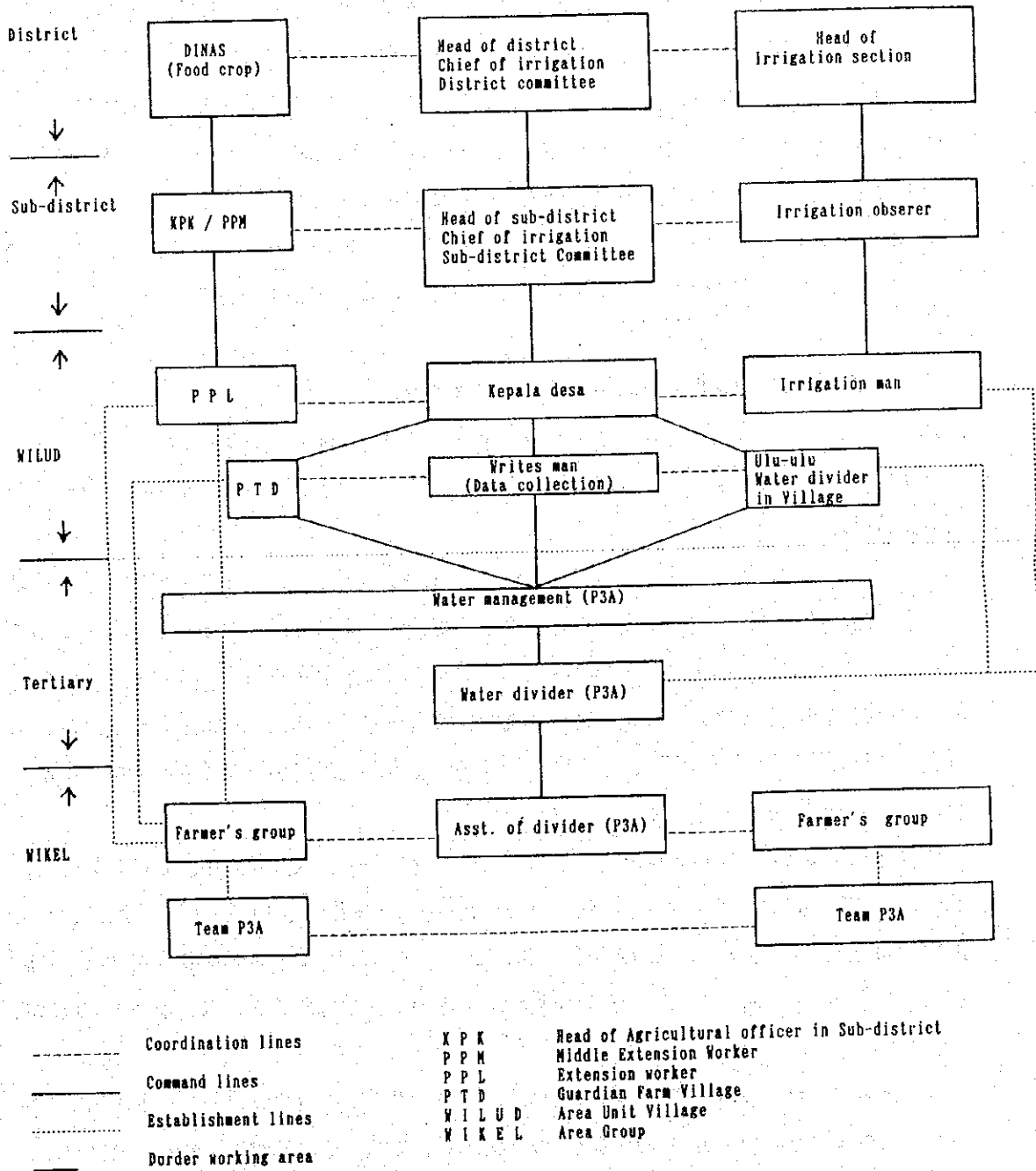


図5 水利組合の関連組織機構図  
(ウオトビプロジェクトの例)

## (2) 水利組合

プロジェクト関係の水利組合は農業基盤整備事業の終わった3村に創設し、灌漑施設の管理、利用について話し合い、作業を行っている。プロジェクトではグループに対して水利組合に関する研修や組合長、水番等の関係者に対する実地指導などを行い施設や水の管理が独自に出来るよう指導している。また作付けについては農民個人の意志で行っているが、農民グループがメンバー間を調整し、より有利な営農ができるよう農業普及員を通して指導している。普及方法は農業省で進めているRDK/RDKK（別紙英文資料参照）の方式に準じるよう指導している。また図5に水利組合と関連組織の図を示した。

水利組合の規定は公共事業省が作成しているインドネシアのモデルに準じて作成している。プロジェクト終了後は公共事業省管轄で維持されるよう調整中である。

### 4-2 農民参加工事に伴う農民組織の育成と資金の積立

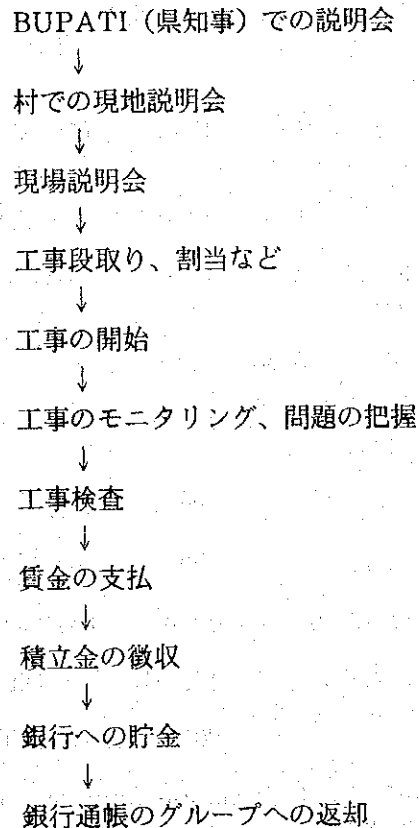
本プロジェクトの農地基盤整備工事はコントラクターに発注し実施する工事と、プロジェクトが直接管理実施する工事と、農民組織を通して農民が労働者として参加する工事との3方式に分けることが出来る。

プロジェクトの目的の一つである農民参加による工事の実施という第3の形態で水路建設工事が一部開始された。そこで本プロジェクトの継続性、維持を図るため資金面からのアプローチとして積立を奨励することを試みた。すなわちこの工事から得られる収入（人夫賃）の一部を農民組織が積立て、施設の維持管理や農業資材の購入に当てる方針が取られた。工事実施のための話し合いの中で、この資金積立の考え方が農民の中に受け入れられ、支払われる人夫賃の25%を積み立てることとなった。

積立資金は各グループ毎に積み立てる事として、支払われた人夫賃の中から積立分をリーダーが徴収し、銀行に貯金する方策が取られた。銀行は6銀行の候補の中から農民によってBANK RAKYAT INDONESIA銀行が選ばれた。この銀行はクングリ市の入り口に支店がありラノメト村に近いこと、また政府銀行であるので安全であることなどの理由で選ばれた。

今回は積立プログラムの最初であるため、プロジェクトからカウンターパートが出てこのシステム育成のための指導に当たった。取りあえず全支払（積立）が終了するまでプロジェクトに銀行通帳を保管することとなった。またこの積立金はグループの活動のために支出することが申し合わされたが、実際の支出についてはグループのリーダーのサインと、農業省地方事務所所長のサインによるダブルサインによって、銀行から引き出せる方式がとられた。これにより積立金の安全性の確保と農業省による支出の指導が可能となる利点を持つことになる。

実際に行われているこのシステム及び経緯を次のとおり図式化した。



ラノメト村の農民工事は2次幹線水路1900mの建設(施工)に携わるもので、この2次水路は3支線からなっている。施工に必要な丁張りはプロジェクト側で行い、工事予定線は25mを1単位として全支線を82等分とした(その後一部路線変更あり)。これに伴い各グループ間で施工担当場所(位置)等の話し合い、調整を行い農民グループに対する工事の割り振りを行った。

1992年9月末までに実施されたラノメト村における農民グループの工事割当、工事实績及び資金の積立状況を事例として次に示す。(表3を参照)

表3 ラノメト村農民事工の実績

Name of Group	Total Members	Participation (A/B)※	Work Position	Length	Payment (Rp)	Stock fund (Rp)
Andinu	12	13/12	As. B. Box-54-57, 37-38	105m	670,000	167,000
Tunas Makmur	18	9/17	57-61, 36-37	100m	776,000	194,000
Makmur Jaya	20	14/14	67-68, 76-77 38-40	100m	841,000	209,000
Makmur Samaturu	24	17/ 8	68-72, 35-36	100m	1,069,000	267,000
Kegiatan Samaturu	14	13/12	BR. 5-13, 34-35	105m	861,000	215,000
Sri Mangiyub	21	21/11	72-76	100m	702,000	174,000
Harapan Makmur	19	13/10	13-17	100m	663,000	165,000
Mokora Meindio	22	13/22	17-19, 29-BR6	100m	858,000	214,000
Sri Kembang	21	14/12	BR. 6-34	100m	909,000	226,000
Total	171	127(74%)		901m	7,349,000	1,831,000

※ Participation : A/B A, possibility numbers which person can participate in the works from a group  
B, Total persons who participated in two times payment works

次にラノメト村の農民事工を実施した際の実際の行程、会議等のスケジュールについてリ  
ストップしたので、他の村で同様な工事を実施するのに参考となるであろう。

ラノメト村の農民事工にかかる関係会議等について

月 日	内 容	参加者※	主催場所
7月17日	県主催プロジェクト説明会	副県知事 郡長、村長	県知事事務所
6月12日	第1回現地説明会	村長、PPL グループ代表	村会議場
8月25日	プロジェクト内説明会 農民説明会段取り	専門家 C/P	プロジェクト 事務所
8月27日	第2回現地説明会	郡長、村長 PPL、グループ 代表	郡会議場
8月29日	プロジェクト内事前打ち合わせ	専門家、C/P	事務所
9月 2日	第3回現地説明会及び現場説明	村長、PPL グループ代表	村会議場